



— 2025 年度夏季展示室だより —

令和7年7月1日発行(通巻第63号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(63)

古写真「土浦高等女学校での防空演習」



目次

○写真・絵葉書にみる土浦(63)	1
○博物館からのお知らせ	1
○振り鳴らす銅製仏具の製作	2
○頭髪を渦巻き状に表した仏さま	3
○陳直の死と家督相続	4
○才助、人種図鑑を改訂する	5
○土浦市の誕生	6
○市史編さんだより	7
○霞 短 信	8
○コラム(63)	8
○情報ライブラリー更新状況	8

土浦高等女学校の卒業アルバムに掲載された、昭和15(1940)年10月5日の防空演習の様子です。木造二階建ての校舎の前に女学生と教員が集まっています。左手の白煙の向こうには、うっすらと奉安殿^{ほうあんでん}が見えます。アルバムの持ち主である女学生の自省録^{じせいりく}(日記)には、「ガス弾一ヶ、その他二ヶの投下があり、訓練が行はれた」と記されています。【情報ライブラリー検索キーワード「学校」「戦時下」】

博物館からのお知らせ

★★夏休みファミリーミュージアムを開催します★★

テーマ展「ご先祖さま一弔う・迎える・期待するー」

7月19日(土)~10月5日(日)

※7月21日(月)・8月11日(月)・9月15日(月)を除く月曜日、

7月22日(火)・8月12日(火)・9月16日(火)・9月24日(水)は休館です。

①戦争体験のお話をきく会 対象:どなたでも(定員30名)

8月10日(日) 午前10時30分~

②親子はたおり教室 対象:小中学生親子(定員各回2組)、参加費200円

「はたおりの会」を講師に招き、古布を使ったはた織り(さき織り)を体験します。

8月21日(木)・22日(金)・23日(土)

午前の部/10時30分~12時 午後の部/1時30分~3時

③ミニ掛軸を作ろう 対象:小中学生親子・高校生(定員8組)、参加費1,300円

7月29日(火) 午前10時~午後3時(自分で作った書画作品の裏打ち)

8月5日(火) 午前10時~12時(書画作品を掛軸として表装)

◆各イベントの申し込み方法◆

① . . . 7月9日(水) 午前9時から博物館に電話(029-824-2928)または受付に直接

②③ . . . 7月9日(水)から申込フォームにて受付開始(③は7月25日(金)締切)



博物館マスコット
亀城かめくん

振り鳴らす銅製仏具の製作

— 鑊の鑄型溶范 —

鑊とは、奈良～平安時代を中心に仏教儀礼で用いた銅製の仏具です。形状は楕円形の鈴に棒状の柄が付き、柄を握って振ることで、鈴の中の丸と呼ばれる小石などが揺れて鳴る仕組みです。

鑊の鑄型溶范（写真1）は銅製の鑊を製作する鑄型で、新治地区の日枝神社（市内小野・沢辺・東城寺入会地）の境内付近で採集されました。全長は28cmで、表面には鑊の形がくっきりと読み取れます（下部は折損）。鑄型を二つ向かい合わせにし、最上部の湯口から溶かした銅を流し込み、鑊が出来上がります。製作年代は、鑄型に残る鑊の鈴や柄の部分の意匠から鎌倉時代とされています。参考資料として、「お水取り」で有名な、東大寺二月堂（奈良県奈良市）の修二会と呼ばれる仏教儀礼で用いた銅製の鑊（写真2）があります。全長は21cmで、柄の上端は環状となり、鈴に鎌倉時代の弘安8（1285）年銘を刻みます。このような事例をもとに、鑊の鑄型溶范の年代が想定されたと考えられますが、近年の研究では平安時代末頃とする見解もあります。

これまで、この鑄型の材質は砂岩とされてきましたが、今回改めて観察すると、粘土を整形して作られていることが分かりました。粘土には、市北部の天の川上流地域の地質を反映する花崗岩の風化物が含まれ、この地域の粘土をもとに鑄型が製作され、日枝神社の境内付近で鑊の製作が行われたことを示唆します。

鑊の鑄型は全国で3例しか知られておらず、本例とおおほりひがし（大堀）東遺跡（下妻市）出土例、御殿遺跡（群馬県前橋市）出土例があります。いずれも土製で、製作された年代は平安時代（9～10世紀）のものとされています。

また、鑊は関東地方でもほぼ北関東の出土品や伝世品が知られ、日光男体山頂遺跡（栃木県日光市）や鹿島神宮（鹿嶋市）周辺など、古代の山岳信仰や神仏習合の拠点で確認され、全て奈良～平安時代のものでされています。

鑊の鑄型溶范は、日枝神社とゆかりがあり、筑波山周辺の山岳仏教の拠点である東城寺との関わりを感じさせます。

（関口 満）



写真1 鑊の鑄型溶范の表面
（当館所蔵）
茨城県指定文化財



写真2 参考資料 東大寺二月堂の鑊
（東京国立博物館所蔵資料の写真展示）
出典：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
いずれも中世コーナーに展示しています。

- 東城寺経塚の出土品 銅製経筒〔複製〕（当館所蔵）
- 東城寺経塚の出土品 銅製華瓶〔複製〕（当館所蔵）



頭髮を渦巻き状に表した仏さま

—神立観音寺の薬師如来—

薬師如来は病いをなおし、健康と長寿をかなえてくれる仏さまです。阿弥陀如来が西方の極楽浄土の教主で死後のやすらぎをあたえてくれるのに対し、薬師如来は東方の淨瑠璃浄土を治め、現世での願いをかなえてくれるとされます。

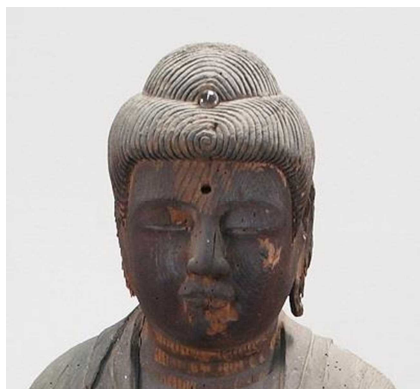
ここにご紹介する観音寺（市内神立町）の木造薬師如来立像（茨城県指定文化財）は、桧材の素地、一木造で、像高は81cmを測ります。鎌倉時代末期から南北朝時代の作品とされ、両袖先・両手・台座は後補のものです。本像で注目されるのは、その頭髮を縄状に刻み渦を巻くようにして表している点です。この髪型は、嵯峨清凉寺（京都市）の釈迦如来像の影響を受けたものと考えられています。清凉寺に安置されている釈迦如来像は、10世紀に入宋中の東大寺僧が浙江省台州で製作させ、日本に持ち帰ったものです。

お釈迦さまをイメージするとき、頭部に螺髪のある姿を思いうかべる方が多いのではないのでしょうか。螺髪は悟りを開いた仏に現われた特徴の一つで、人間を越えた存在であることを表現しています。これに対して清凉寺の釈迦如来は、髪筋を渦巻き状に表しています。これはガンダーラ彫刻に見られるようなウェーブがかかった髪型を形式化して表現したものです。この髪型の特徴などから、この像は生前の釈迦の姿にもっとも近いものであると認識され、戒律を重視して仏教の復興を重んじた鎌倉時代の律宗（真言律宗）の人々により盛んに模刻されました。釈尊が在世した当時の、戒律が守られていた時代に戻ろうとする律宗の意向が現われたものと考えられます。律宗の総本山たる奈良西大寺（奈良市）の本尊の釈迦如来立像は、清凉寺に仏師を派遣して模したものですし、東国の律宗の拠点となった鎌倉極楽寺や称名寺（横浜市）にも清凉寺式の釈迦如来をみることができます。

前述のとおり、頭部に渦巻き状の表現がみられる土浦市観音寺の薬師如来も、清凉寺像の影響を受けたものと考えられています。霞ヶ浦に注ぐ桜川をさかのぼった薬王院（桜川市）の鍔銅の薬師如来坐像も、頭部を渦巻き状に作り出しています。他にも霞ヶ浦や印旛沼周辺には清凉寺式の仏像がいくつか残されており、清凉寺式が多くみられる地域になっています。霞ヶ浦周辺における律宗による布教活動の足跡は、つくば市小田の極楽寺跡、土浦市中央の般若寺、同東城寺の東城寺にみられる五輪塔や結界石に代表されますが、清凉寺の影響を受けた仏像の分布も東国における律宗の活動をうかがうひとつの手がかりになっています。

（萩谷良太）

木造薬師如来立像（観音寺所蔵、茨城県指定文化財）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
いずれも中世コーナーに展示しています。
●十二神将立像（観音寺所蔵）
●般若寺出土の瓦（当館所蔵）



のぶ なお

陳直の死と家督相続

—土屋陳直遺言書—

土浦藩土屋家3代当主の土屋陳直は享保19(1734)年1月16日に亡くなったとされます。このことは江戸幕府が編纂した系譜集『寛政重修諸家譜』などに記されています。陳直が亡くなると、息子左門(のち篤直)が4代当主として家督を相続しました。今回は、幕府老中へ提出された陳直の遺言書を紹介します。

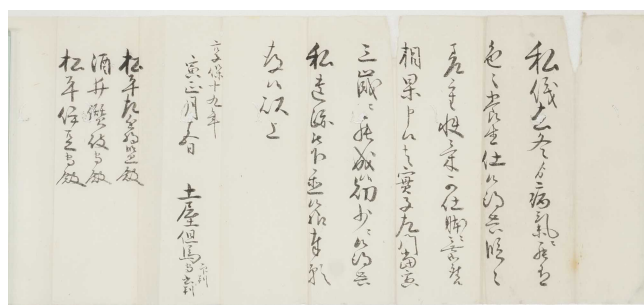
下の写真が陳直の遺言書の写しです。享保19年1月15日の下に「土屋但馬守書判」とあり、陳直(但馬守)が署名し花押(書判)を据えています。その右脇には「印判」とも記されているため、花押と印判を併用していたと考えられます。遺言書の宛所は松平乗邑(左近将監)・酒井忠音(讃岐守)・松平信祝(伊豆守)の3名で、いずれも老中です。当時、大名が隠居し家督を相続させる場合は、隠居願いとともに入督相続の願書を幕府へ提出する必要があったため、この遺言書も幕府へ提出されたと考えられます。ただし、提出した翌日に亡くなるのはやや不自然ですので、陳直はこの時すでに亡くなっていた可能性もあります。

遺言書の内容を見ていきましょう。陳直は「昨年冬に病氣となった。いろいろと療養をしたものの、次第に病状が悪化し治る体ではなくなってしまった」と述べています。そのため自身が亡くなった際には、3歳と幼年であるが、実子の左門に家督を継がせてもらいたい旨を記しています。当時、将軍への初御目見は15~16歳頃に行うのが慣例でした。そのため、土屋家は跡取りとなる子こそいたものの、将軍への御目見も果たせていない状況でした。

陳直が亡くなったことで、土屋家は喪に服す「服忌」を幕府へ届け出たと考えられます。当主の父親が亡くなった場合、服忌の期間は「忌日五十日服喪十三ヶ月」が通例でした。忌日中は江戸城への登城も控えることになったため、家督相続が許され、御礼に登城するのは忌明けとなりました。享保19年3月14日、忌明けに家督相続が許された土屋家は、相続の御礼を述べるよう登城が命じられています。左門はまだ将軍へ御目見をしていないため、名代として親族の土屋平八郎(亮直)の登城が命じられています。

幼年当主とその家族、それを補佐する藩士による藩政は、ここから始まることになります。(西口正隆)

参考文献：大森映子『お家相続』(吉川弘文館、2018年)※原著は角川書店、2004年



土屋陳直遺言書(当館所蔵)

私儀、去冬方病氣二罷有、
色々養生仕候得共、段々
差重快氣可仕跡二無御座候、
相果申候は実子左門当寅
(寅直)
三歳二罷成候幼少二候得共、
私遺跡被下置候様奉願
存候、以上
享保十九年 印判
寅正月十五日 土屋但馬守書判
(陳直)
松平左近将監殿
(乗邑)
(忠音)
酒井讃岐守殿
(信祝)
松平伊豆守殿



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 「御系譜」(当館所蔵)
- 「老中御書付」(写真 人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵)



才助、人種図鑑を改訂する

—訂正四十二国人物図説—

土浦藩士・山村才助（1770～1807）は、江戸時代後期を代表する世界地理学者です。大槻玄沢（1757～1827）に入門し、玄沢の蘭学塾・芝蘭堂で学びました。才助の有名な業績は、新井白石（1657～1725）の世界地誌『采覧異言』を大幅に改訂した『訂正増訳采覧異言』をまとめたことです。また、師の玄沢の講義内容をまとめた『西洋雑記』も挙げられます。いずれも過去に『霞』（15、27、59号）で紹介しました。

今回紹介する彼の業績は、『四十二国人物図説』の改訂です。この書は、享保5（1720）年に西川如見（1648～1724）によってまとめられた世界人種図鑑で、42ヶ国の人物図とその国の概要が記されています。才助は、師の玄沢からこの書の改訂を命じられ、『訂正四十二国人物図説』をまとめました。

『訂正四十二国人物図説』の内容を少しのぞいてみましょう。ロシアの項目を見ると、おおよそ次のように述べられています。

ヨーロッパ東部の境にあり、領地はとても広大である。当初、この国の風俗は卑しく、人びとは道理や正義を弁えず、文字も知らなかった。しかし、寛文12（1672）年に「ペトル・コロラト」が誕生した。この皇帝の才知と人徳には世に並ぶものがなく、人びとに教えを施して文字や諸技芸を習わせ、古い弊風を改革して富国強兵を図った。西はポーランドやスウェーデンを征服し、南はトルコを破り、東はモンゴルを併合して、砂漠から氷海、蝦夷東北のカムチャッカに至るまで領地となし、国守を置いて統治にあたらせた。今は天下一の帝国となり、領地の広大さは他国におよぶものはないということである。俗にヲロシアと呼ぶ。

ここには、ロシアが強国となるに至った歴史が述べられています。事実の誤認も見受けられますが、強国化の画期としてピョートル1世（1672～1725）の事績が紹介されている点は注目されます。

現代からすると、才助の訂正内容は不十分に思えるかもしれません。しかし、彼が生きた時代は、幕府によって外国に関する情報が厳しく制限されていました。この資料は、そうした環境のなかにあつて、限られた文献の緻密な考証により生み出された貴重な成果といえます。

（井上 翼）



訂正四十二国人物図説（部分・当館所蔵）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
いずれも近世コーナーに展示しています。

- 「訂正増訳采覧異言」（当館所蔵）
- 「西洋雑記」（当館所蔵）



土浦市の誕生

—廃された土浦町と真鍋町—

昭和15（1940）年11月、土浦町と真鍋町が廃され、土浦市が置かれました。11月3日当日には、土浦と真鍋の旧町長のコメントが載った特集が新聞各紙で組まれるなど、大きく報道されています。

合併をすすめた両町の町長はどのような人物だったのでしょうか。『時の人』（昭和14年発行）によれば、土浦町長の萩谷徳一^{はぎやとくいち}は、久慈郡幸久村^{くしぐんさきくむら}（常陸太田市）の生まれで、水戸・下館・土浦の各警察署につとめ、後に警務課長となり、さらに警視として京都府に赴任しました。手腕家としての評判が高かったため、町の有力者に乞われ土浦町の町長となり、大土浦の基礎を築いたとされます。昭和10年からは県議員もつとめました。一方の真鍋町長の菊田禎一郎^{ていいちろう}は、新治郡真鍋町の生まれで、土浦中学卒業後は家業（農業）に励み、後に祖父・父と同じく町長となり、さらに木田余出身^{きだまり}の天谷丑之助^{あまがいうしのすけ}が県議員を引退後、県議員となりました。同書では、土浦町を近來の移住者を多数擁する地、真鍋町は祖先以来の永住者に依って占められる地としていますが、二人はそれぞれの町の特性を示す人物であったといえそうです。

合併前の土浦町と真鍋町の状況については『土浦町真鍋町合併調査資料』（昭和15年）に、沿革・産業・財政・教育ほか17項目にわたるデータが整理されています。「将来ノ計画」の項目には、軍都かつ生産都市としての躍進、商業組合の発達や農家組合の指導の奨励などが掲げられています。前者はとくに土浦町の、後者は真鍋町の特筆すべきもので、全市的な課題としたことがうかがえます。本資料はどこが作成したのでしょうか。茨城県立歴史館所蔵の「土浦町・真鍋町合併関係資料」（行40-26）の中に下書が保存されており、県が両町のデータを集約し1冊にまとめたと考えられます。

新聞の特集記事のなかで吉永知事は、土浦市の市制施行が紀元2600年記念事業の中でも最高の事業であるとし、県としてはこの市制施行を大政翼賛運動の推進の一翼たらしめて、新生土浦市の発展を図りたいなどとコメントを寄せ、茨城県が県で3番目の市の誕生に大きな期待を寄せていた様子がうかがえます。

『土浦市史』（昭和50年）は、合併について「真鍋町は財政状態もよく、積極的に土浦に合併する必要性はなかったが、当時の真鍋町長の菊田禎一郎が大陸方面視察から帰朝後、従来の消極的な方針を変更し、両

町が合併することにより市制実現が間違いない見通しとなったので、土浦町と真鍋町を廃して、即ち対等合併という形で合併に同意した」と述べていますが、半農半商の町であった真鍋町の事情、戦時下の国策・県の意向など、複合的な要因によって、土浦市は誕生したと考えられます。

（野田礼子）



市制施行を伝える新聞記事（当館所蔵）菊田禎一郎（左）と萩谷徳一（右）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
いずれも近代コーナーに展示しています。

- 紀元二千六百年式典参列証（当館所蔵）
- 絵葉書 空都 水郷の土浦（当館所蔵）



市史編さんだより

戦時下の女学生の日記

「またシナといくさですか」「ま、すぐに片づくじゃろ」。現在放映中のNHK朝の連続テレビ小説「あんぱん」の一場面で、昭和12(1937)年7月の朝、ラジオを聴きながら主人公の母と祖母が交わした会話です。しかし戦争はすぐに終わることはなく、女子師範学校を卒業し教師になった主人公は、愛国の鑑^{かがみ}と呼ばれながら子供たちを教育することに徐々に息苦しさを覚えていきます。

近年博物館に、ドラマの主人公と同時代の女学生の日記が寄贈されました。今回は、その土浦高等女学校生徒の日記の一部をみていきたいと思います。

作成者の福田^{ふくだ}富美^{ふみ}さんは大正13(1924)年、山ノ^{やまの}荘^{しょう}村^{とうじょう}東^し城^{せいらく}寺^じ(市内東城寺)生まれで、日記は在学中の4年間(昭和12~15年度)の「自省録」です。写真1は初日の日記で、入学式をむかえ、意気揚々と楷書体で記すさまからは、まだあどけない少女の顔が浮かびます。少女の日常に戦争が入り込むのは間もなくのことでした。7月28日には、父母が戦争の話でもちきりだったこと、同月31日には千人針^{せんになんばり}をおばあさんと真心^{しんしん}をこめて縫ったこと、8月16日には村内で父親が出征^{しゅつせい}する家があったことにふれています。

8月16日 今日、朝から、花火の音が聞こえて居ました。出征する家では、母子二人残^{のこり}なのでした。皆、泣きました。子供は、お父さんにしがみついて泣きました。

(教師書込 「国のためですけど、ほんとうにこんな事をききますと泣かされて了^{しま}ひますね」)

でもつとめは重い、お父さんは「おみやげ買って来るから」といって、ふりきりました。見送の人は顔をそむけました。後で、母と子をなぐさめる人が大勢集って居ました。少年団では、仕事を手伝ふ様にきめた相^{そう}です。夕方、水まきをしました。明日も又、出征する人があるのだと思うと、北支事変の光景がめに見えるやうな気がしました。

写真2は4年生になった、昭和15年6月1日の日記で、変体仮名など書体の変化もみられ、成長のあとがうかがえます。興垂奉公日^{こうあ}で、国旗掲揚と宮城^{きゅうじょうようはい}遥拝もあつたけれど、最初の頃と比べて緊張感が乏しくなっていることを反省しつつも、試験が終わりほっとした様子で「明日の日曜が待たれる」と女学生らしい素直な気持ちを記しています。

「自省録」は当時の学生が教員への提出を前提として書いた日記であるため、時局にふさわしいふるまいを意識した様子が見られるものです。しかし当時の山ノ荘村の様子や土浦高等女学校での日常を知る手がかりとなるものであり、戦時下のふだんの暮らしぶりや少女の素直な内面も滲み出た日記でもあったのです。

(野田礼子)

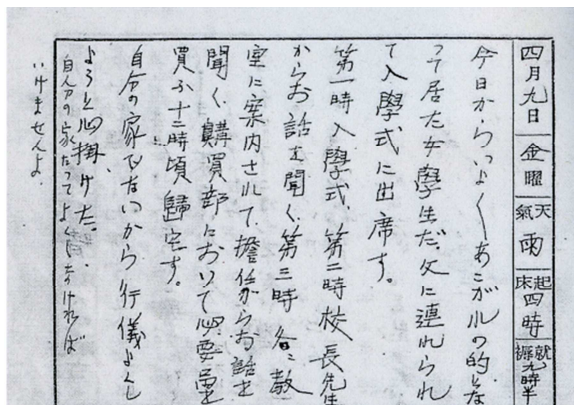


写真1 昭和12年4月9日の日記
(当館所蔵)

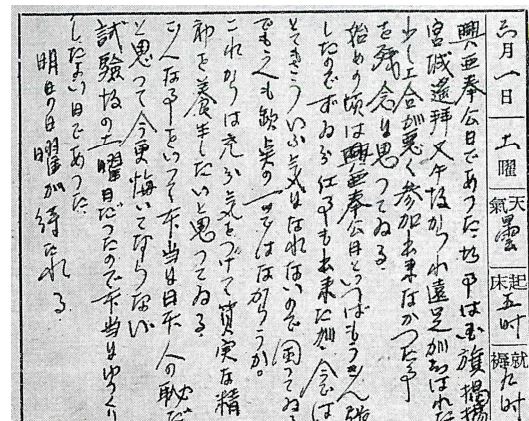


写真2 昭和15年6月1日の日記
(当館所蔵)

霞 短信

このコーナーでは、博物館活動にかかわる方々の声やサークル活動の記録などをお伝えしております。

今号では令和6年度末で退職された木塚久仁子学芸員にご寄稿をいただきました。木塚さんは昭和63（1988）年の博物館開館以来、37年間にわたり博物館で近世史担当の学芸員として従事されました。

ご挨拶—展示室だより「霞」読者のみなさんへ

いつも「霞」を読んでくださり、ありがとうございます。前号（62号）の短信やコラムで紹介していた通り、「霞」の刊行は易しいことではありませんが、平成19（2007）年10月の創刊から18年継続してこられたのは、読んでくださるみなさんのおかげです。

私ごとで恐縮ですが、令和7（2025）年3月31日付で博物館を退職いたしました。振り返ってみると、博物館は情報が自然に集まってくる場所でした。「霞」のご感想やご意見、歴史や民俗に関するさまざまなご質問をいただきました。なかには初めて知ることや見落としてきたこともありました。回答を準備しながら、不確かな知識を確かなものにしていく、新たな気づきを得る、そんな繰り返しから重要な視点を見出すこともありました。博物館に寄せられるご感想やご質問は、大切な情報源だったと思い返しています。

さて、「土浦市立博物館の木塚です」と、自己紹介して37年過ぎてまいりました。既知の方にも口癖のようにくりかえすので、「知ってるよ」と返されたことも一度や二度ではありません。退職して3ヶ月たちますが、初対面の方にはつい「博物館の」といいかけ慌てて口をつぐんでいます。先日、土浦市内の和菓子店のご主人に、木塚は買い物に来る時も「博物館です」と言いながら店に入ってきたと指摘されてしまいました。博物館学芸員が立ち位置だったことに改めて思い至りました。

退職して何をしているの？とよく聞かれます。非常勤講師として大学で博物館学の講義をしています。学芸員の資格を取ろうとしている若い人たちに博物館の意義と役割を伝えるのは、大学と博物館の現場をつなぐ重要な任務であると、気を引き締めて授業に臨んでいます。また、私は土浦市に育ててもらった学芸員で、フィールドは土浦です。現在温めているテーマを、いつかみなさんにご披露することを夢見ています。

最後に、「霞」読者のみなさんにご挨拶をする機会を作ってくださいました元仲間たちにも、感謝いたします。ありがとうございました。

（元土浦市立博物館学芸員 木塚久仁子）

コラム（63） 充実した館蔵品を引き継ぐ

今春の特別展では、江戸時代の土浦藩主・藩士、城下町の町人にスポットをあてました。取り上げた人物は13人、もてる展示ケースをフル活用し、陳列した資料は200点を超えました。借用品や写真パネルも含まれますが、いつもより館蔵品の占める割合が高い展示となりました。

当館は近世城郭に建つ歴史博物館ですので、江戸時代の資料が豊富に収蔵されているのは、至極当然のことだと思われるかもしれません。しかし、陳列した資料の多くは、昭和63年の開館当初から収蔵されていたわけではありません。大小さまざまな展覧会を開催し、調査研究が進展するなかで、寄贈や寄託を受け、購入をしたものが大半を占めています。開館以来37年間の月日をかけて、江戸時代のお城の跡に建つ博物館に相応しい館蔵資料が整ったことで、今回の特別展は実現しました。

木塚久仁子さんのご退職により、開館当初から在席した学芸員は全員が卒業をされたこととなります。後進の私たちの使命は、この間に先輩学芸員が集められてきた膨大かつ貴重な資料を後世に引き継ぐとともに、その魅力を発信していくことだと思っています。（萩谷良太）

情報ライブラリー更新状況

【2025・7・1現在の登録数】

古写真 606点（+0）

絵葉書 514点（+0）

※（ ）内は2025年5月13日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは、画像資料・歴史情報を随時追加・更新しております。1ページで紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞（かすみ） 2025年度

夏季展示室だより（通巻第63号）

編集・発行 土浦市立博物館
茨城県土浦市中央1-15-18
TEL 029-824-2928
FAX 029-824-9423
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/tsuchiurashiritsuhakubutsukan/index.html>

1～6ページのタイトルバック（背景）は、博物館2階庭園展示です。

2025年度夏季展示は、2025年7月1日（火）～9月28日（日）となります。「霞」2025年度秋季展示室だより（通巻第64号）は2025年9月30日（火）発行予定です。次回の来館もお待ちしております。